



Title	はしがき
Author(s)	吉田, 豊; 森安, 孝夫
Citation	内陸アジア言語の研究. 1995, 10, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/21807">https://hdl.handle.net/11094/21807</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## は し が き

世界中からおびただしい量の学問業績が輸入され、時には「新しい学問」と銘打たれるものが丸ごと輸入され、往々にしてその単なる翻訳紹介者が学者として通用する我が国の学問世界にあって、東洋学、すなわちユーラシアの五分の三以上の領域をカバーする広大な地域に生きる民族の歴史・言語・文化・宗教に関する学問は、その業績の多くが輸出に堪える数少ない分野である。その東洋学の中にあっても内陸アジア学は、明治以来一貫して奮闘を続け、いわば学問のオリンピックで数々の輝かしいメダルを獲得してきたのである。本誌はその一角を担う学術雑誌として、これからもますます存在意義を高めていきたい。

本誌の発行母体が神戸市外国語大学から中央ユーラシア学研究会に移った事情は、前々号「はしがき」に述べた通りである。それにともなって本誌の市販が可能となったが、この販売業務は京都の朋友書店（TEL.075-761-1285）に委託することとなった。採算を度外視してこの面倒な業務を引き受けていただいた土江澄男社長に改めて感謝する次第である。

本誌は『内陸アジア言語の研究』と題しているが、決して狭義の言語学のみを対象とするものではない。歴史学の根本である史料のほとんどは「言語」で書かれたものであり、その言語史料を紹介したり、読解・分析する論文・報告は全て本誌の対象となる。我が国の在来の東洋学関係雑誌では、史料（資料）そのものを十全な形で発表するよりも、それに基づく議論を展開する方が優れた仕事とみなされる傾向にあった。そして紀要類以外は頁数に厳しい制限があるため、論の基になる原史料は部分的引用に止まらざるを得ないことが多かった。このような実情に鑑み、本誌では、新発見の一次史料（資料）の紹介、既知の史料（資料）の新しい解釈・訳註などを、頁数の多少に関わりなく掲載する方針を採っている。もちろん我々も大きな構想のもとに展開される歴史学的論考を重視しているが、言語史料の言語学的研究・古文字学的研究・古文書学

的研究・文献学的研究のいずれにも同等の価値を認めるものである。また本号には図像学的資料、すなわち「絵画言語」に関わる論考まで含み、対象範囲をさらに広げている。今や本誌の実体は「内陸アジア学研究」になりつつある。昨年度から新体制になった内陸アジア史学会の発行する『内陸アジア史研究』ともども切磋琢磨しつつ、斯学の発展に寄与したい。質の高いものであれば分野を問わないので、積極的に投稿されることを心から期待している。

今回もまた前号同様、組版をはじめとする出版作業は、中村淳・松川節両君の献身的協力に負うところが大きい。記して感謝する次第である。

1995年7月7日

中央ユーラシア学研究会

責任編集

吉田 豊 森安孝夫  
(神戸市外国語大学) (大阪大学)